



平穏な時間は、実際以上に長く感じる。特に、集中力を保つ必要がある時は余計だ。だが、過ぎてみれば、それも案外あっという間である。6時間ほどの平穏なシフトの後、俺とケイはまた少し仮眠して、それからコックピットに戻った。今回はケイの侵入もなく、短時間だがゆっくりと休むことができた。さて、いよいよブラックホールを周回する軌道に入る時間が近づいてきた。

「各衛星は所定の軌道に入りました。収集したデータはユイを経由してアカデミーに送信中」

「よし。最終的な軌道を確認しよう。沢村、チャートを出してくれ」

「了解。チャートを出します。我々の軌道は、ブラックホールに対する褐色矮星の軌道面に直交する半径4光時の軌道です。正確には、円軌道ではなく、連星系の重力的影響を受けた軌道になります」

「先生、ブラックホールの極軌道はジェットの影響を受けて危険なんじゃないですか？」

「大丈夫だ。この連星系の軌道面は、ブラックホール自体の回転軸と直交していない。奇妙な話だが、そのおかげで我々の軌道がブラックホールのジェットを横切る心配はない。やはり、この褐色矮星は最近、ブラックホールに捕獲されたものである可能性が高いな。そうでなければ、こんな軌道はありえない」

「何から何まで異例ずくめということですね」

「確かにそうだが、ある意味じゃ、我々が宇宙について知っていることの方が、まだまだ少ないということの証明かもしれんな」

言われてみれば、そのとおりだ。この銀河系ですら、直径10万光年の大きさがある。一方、我々人類の行動範囲は、地球を中心に、たかだか数百光年の範囲でしかない。可能な最大速度をもってしても、銀河の端から端まで飛ぶのには25年近くかかってしまう。隣の銀河ともなれば、数百年を要してしまうのである。まだまだ我々が知らないことのほうが、はるかに多いに違いない。

「よし、軌道は問題ないな。中井、この軌道をフライトコンピュータにセットしろ。あとは自動で行くぞ」

「了解しました。軌道をセットします」

「コース確認、正常です。軌道投入完了まで2時間33分」

「よし、沢村は引き続きコースをモニターしてくれ。ユイは衛星の監視とデータ処理状況の

確認をたのむ」

「了解です」

「了解しました。衛星の軌道は正常。連星系の重力変動の影響は随時補正します。センターコンピュータからのフィードバックによれば、現在、対応シミュレーションに必要なデータの3%を収集済み。100%の収集には、74時間28分30秒プラスマイナス13分50秒程度を要する見込みです」

「3日ちよつとか。それまでに本隊が到着できるといいんだがな。そうすれば、すぐに作業を開始できる」

「先生、一刻の猶予もないのは承知していますが、本隊が到着したら少し休養を取ることを提案します。まだ先は長いと思いますので、ここで無理をしすぎない方がいいのではないでしょうか。皆さん少しずつ疲労が蓄積していきますから」

「そうだな。クレア君の言うとおりだ。本隊には設備が整った大型船が多いから、ホテル並の環境で休養できるだろう。それまで、あと数日頑張ってくれ」

「了解しました。皆さんも、体調の異常を感じたら遠慮なく相談してくださいね」

さすがマリナである。緊張しているからか、それほど疲れは感じないのだが、そう言うときほど知らず知らずに疲労が蓄積しているものだ。幸いにも本隊が到着してしまえば、俺たちの出番はあまりなくなるはずだから、とりあえずはゆつくりできそうだ。それを楽しみにして、あと3日ほど頑張るとしよう。



突然、コックピットに甲高いアラーム音が響いた。

「針路上、障害物を検知。多数の隕石群。衝突コースです。相対速度はポイント6c、衝突まで5分」

ケイが叫ぶ。

「中井、回避行動を」

「了解、ケイ、回避コースを出してくれ」

「マップに投影するよ。でも、これは・・・障害が多すぎるかも」

マップ上に投影された回避コースは、かなり入り組んでいる。これはコンピュータに操縦を

まかせたほうが無難だ。

「よし、フライトコンピュータにコースをセット。回避行動に入ります」

「ケンジ、コースが安定しないわ。操縦が追従できない」

「どういふことだ、ケイ」

「隕石群のコースが揺らいでいるみたい。重力場の影響だと思っけど、補正しきれない」

「これじゃダメだ。突っ込むぞ。ユイ、なんとか出来ないか？」

「ブラックホールと褐色矮星の重力場の摂動の影響と思われます。補正を試みますが、予想では5分12秒必要です」

「それじゃ間に合わない。くそ」

「ケンジ、操縦を替わって。とりあえずマニュアルで、しばらくしのげればなんとかなるでしょう」

「無茶だ、美月。この速度でマニュアル操縦なんて」

「少なくとも、コンピュータとあんたよりも多少はマシよ。それ以外に手はないわ」

光速の70%もの相対速度を持つ相手に対してマニュアルで対処するなんて、ある意味自殺行為だ。おまけに相手の軌道は極めて不安定である。だが、それ以外にどんな手がある？

「ユイは星野さんの提案を支持します。これまでの操縦評価からして、この中で星野さんが最適と思われます。最初の隕石の遭遇から28秒間しのいでください。そうすれば自動操縦に切り替えられます」

「よし、星野。やってみる。私がバックアップする。中井は周辺の監視をたのむぞ」

「了解しました」

平穩が続いたので、これは楽勝などと思ったのがまずかったか。いきなりのピンチである。こんなところで木っ端みじんにはなりたくない。美月の腕に賭けるしかないが、何か出来ることはあるのか。

「方位080、065、最初の一群が来ます」

ケイが叫ぶ。

「エイブラムス、デフレクター出力最大で前方に集中させろ。星野、小さいのはいい。でかいのだけはなんとか避けてくれ」

「了解。なんとか・・・」

機体がガタガタ揺れる。デフレクターが細かい隕石をはじいているからだが、細かいとはいえ、光速の70%もの速度で飛んでくる隕石をまともに食らったら、あつという間に木っ端みじん、というか蒸発である。

「デフレクターの負荷率80%、これ以上は危険です」

危険と言われても、美月は大きな奴を避けるので精一杯だ。もう少し広い範囲を見通せればいいのだが。俺がそう思った瞬間に、サラウンドにイメージが重なってきた。たぶんユイが察してくれたのだろう。隕石群の分布図のようだ。前方に小隕石の密度が薄い部分がある。そこへ向かえば一息つけそうだ。

「美月！」

「わかってる」

たぶん、言葉にするよりも早く、俺の考えは美月に伝わっている。これなら、俺は広範囲に意識を散らして全体像を把握することに集中すればいい。

「デフレクター負荷20%に低下。機体の損傷はありません」

「まだ油断するな。次が来るぞ」

フランクが叫ぶ。

「第二群、方位320、030、来ます」

機体がまた大きく揺れる。コックピット内に鋭いアラーム音が響いた。

「デフレクター負荷率90%、機体表面に軽微な損傷」

「正面15光秒、大隕石群」

「回避コース」

正面にでかいのが数個。比較的間隔は広いから回避はできるが、問題はその後だ。大隕石の美月が向かった先には濃い小隕石の雲がある。うっかりそれに突っ込んだら袋小路だ。

「こっちはダメね。コース変更」

「ああ、それでいい」

「危ないところね。あれじゃ袋小路だわ」

ちよつと肝を冷やしたが、これも抽象思考インターフェイスの効果なのだろうか。

「第三群、第四群、続けてきます。方位350〜050、010〜060、15光秒」

「どれも狭いわね。とにかく行くしか・・・」

隕石群は広がりながら連続してやってくる。隕石同士がぶつかった結果だろうか、大隕石群はその内部に小隕石の雲を抱えている。そこに飛び込めば逃げ場がない。だが、クリアな隙間がまったく見当たらないのである。このままでは、小隕石の雲に突入してしまう。どこか、隙間は・・・。

「ほら、あそこ・・・」

そう言われた気がして、そちらに意識を向けると、少し隙間ができて、それが広がりつつある。どうやらピンポイントでそこを抜けていくしかなさそうだ。

「行くしかないわね。みんな覚悟を決めてよね」

美月はそう言うと、その狭い隙間にコースを向ける。それはあつという間の時間だった。次の瞬間、船は隕石群を通り抜けていた。

「ふう、命が縮まるな」

フランクが汗を拭きながら言う。

「ここから3光分先まではクリアです」

とケイ。とりあえず、一息つく時間はありそうだ。だが、こんなことを続けていれば、そのうち破綻するのは見えている。

「重力変動パターンの解析が終了しました。以降の回避操作は自動で行えます」

ユイの声である。どうやら、アクロバットの必要はなくなっただけらしい。最後のルートを教えてくれたのはユイだったのだろうか。

「先生、こんなところに、しかもこんな高速の隕石群がどうしてあるんですか？」

「ブラックホールの影響だろうな。ブラックホールは何でも吸い込むと思われがちだが、飛び込むコースによっては、吸い込まれずに加速されることもあるんだ。たぶん、小惑星などが重力で破碎された上に加速されて放出されたと考えるべきだろうな。この件は後続の本隊にも連絡しておこう。エドワース、フライトコンピュータのログを含めてデータをアカデミーに送信してくれ」

「了解しました。送信します」

「全員、まだ油断するな。ここから先は何が起きるかわからん。自分の持ち場に集中しろ」

フランクが言うとおりのだ。我々は、宇宙で最も凶悪な存在に接近しつつある。しかも、状況には不明な点ばかりだ。何か異常を見落とせば命取りになりかねない。とりあえず安定した軌道に入るまでは、神経を研ぎ澄ましておこう。